

# 「金融資本」概念にかんする一考察

佐藤 定 幸

## I

最近現代資本主義研究の重要な一環として、金融資本にかんする理論的実証的労作が内外で発表されつつある。これらの諸労作に裨益されること少くないことを後学の1人としてふかく感謝するものではあるが、それにもかかわらず読後に積然たらざるものが残るのをいかんともしがたい。それはなによりも、「金融資本」概念の把握において諸労作が必ずしも明確ではないことに原因しているように思われる。そこで、この小文では「金融資本」概念をいかに把握するかについて若干の考察を行い、諸先学の教示を待ちたい。

## II

レーニンがその『帝国主義論』のなかで金融資本をつぎのように規定していることは、あまりにも有名である。「生産の集積、そこから発生する独占、銀行と産業の融合あるいは癒着——これらの点に、金融資本の発生史と金融資本の概念の内容がある。」<sup>1)</sup>おなじように、レーニンのこの規定がヒルファディング R. Hilferding の規定にたいする批判として提起されたものであることもよく知られている。ヒルファディングによれば、「産業資本のますます多くの部分は、これを使用する産業家に属さなくなる。彼らがこの資本の処分権を得るのは、ただ、彼らにたいしてこの資本の所有者を代表する銀行をとおしてである。他方、銀行はその資本のますます多くの部分を、産業に固定しなければならなくなる。こうして、銀行はますます大きな程度で産業資本家となる。このような仕方では実際には産業資本に転化されている銀行資本、すなわち貨幣形態にある資本を、私は金融資本と名づける。」「金融資本とは銀行の管理下にあつて、産業家によって使用される資本である。」<sup>2)</sup>

レーニンはヒルファディングのこの定義にたいして、「この定義は、そのなかに、もっとも重要な要素の1つ、

1) В. И. Ленин, Соч. т. 22 стр. 214. (邦訳, 全集, 第22巻, p. 260.)

2) 同上。(ヒルファディングの原文は, *Das Finanzkapital*, 1955. S. 335—336.)

——生産と資本との集積は、それが独占にみちびきつつあり、またすでにみちびいたほど高度にたっしているということにたいする論及がないというかぎりでは、不完全である<sup>3)</sup>とのべ、前記の定義で置きかえている。ヒルファディングにとっては、金融資本とはなによりも産業を支配する銀行資本であるが、レーニンにとってはそれだけでは不十分であった<sup>4)</sup>。レーニンによれば、帝国主義とは資本主義の独占的段階であり、金融資本はこのような資本主義の独占的段階を前提としてはじめて可能な産業資本と銀行資本の融合であり癒着である。このさいレーニンとヒルファディングの相違は、後者が一般的には言及しながらも金融資本の概念規定のときには忘れ去ってしまった資本主義的独占を前者が金融資本成立の基礎においたことである。これはレーニンが帝国主義を資本主義の最高の段階、資本主義的自由競争が資本主義的独占にとってかわった段階として把握したのにたいし、ヒルファディングが資本主義の新しい段階とその本質を理解できなかったことに基くものであった。

したがって、金融資本とは銀行資本であるのか産業資本であるのかという問題提起そのものがナンセンスである。金融資本概念の本質は、資本主義的独占を前提とした産業資本と銀行資本の融合ないしは癒着であつて、それ以外のなにものでもない。「金融資本=銀行資本は不十分ではないか」と『帝国主義論ノート』に書いた当のレーニンが、『ノート』をもとに書き上げられた『帝国主義論』のなかで「金融資本とは、産業的独占団体の資本と融合している独占的な少数の巨大銀行の銀行資本である」<sup>5)</sup>とのべても、それはけっして不思議ではない。

レーニンは『帝国主義論』当時は未だヒルファディングにひきづられていたが、その後の著作できっぱりとヒ

3) 同上。

4) レーニンは『帝国主義論ノート』(“Тетради по империализму”, 1939. стр. 287)において、ヒルファディングを批判しながら、「金融資本=産業を支配する銀行資本, [《金融資本=銀行資本》では不十分ではなからうか]」とのべている。

5) В. И. Ленин, Соч. т. 22. стр. 214. (邦訳全集, 第22巻, p. 260.)

ルファディング的規定と絶縁したという説があるが、これはレーニンの金融資本概念にたいする誤解に基いているように思われる。すなわち、副島種典氏はこう書いている。「レーニンは『帝国主義論』を書いたあと(この著書が公刊されたのは1917年のなかごろであるが、執筆は1916年の前半になされた)、いくつかの問題で『帝国主義論』における叙述を改訂し発展させている。そのうち金融資本の規定については、レーニンは《金融資本=銀行資本》というヒルファディングの規定をきっぱり捨てて、すでに1916年8—10月に書いた『マルクス主義の戯画と《帝国主義的経済主義》』のなかで、《金融資本は、独占にまで成長して銀行資本と融合した巨大産業資本である》(全集、第23巻、43ページ)と書いている。また、『帝国主義と社会主義の分裂』のなかでも、レーニンは、《金融資本とは銀行資本と融合した独占的産業資本である》(同、112ページ)と書いている。したがって、ヒルファディング流の《金融資本=銀行資本》ではなく、《金融資本=独占的産業資本》という定式は、『帝国主義論』執筆直後にレーニンの頭のなかにはっきり形成されたこととみることができよう。」<sup>6)</sup>

副島氏によれば、レーニンは《金融資本=銀行資本》から《金融資本=独占的産業資本》に意見を変えたことになるが、前述のように『帝国主義論』は明らかに《金融資本=銀行資本》というヒルファディング的規定への批判の上に書かれているし、事実レーニンは金融資本は銀行資本であるなどと一度ものべてはいない。『帝国主義論』の書かれたのは1916年1—6月であるが、書き終った途端に説を変え、同年8—10月の『マルクス主義の戯画と《帝国主義的経済主義》』と同10月の『帝国主義と社会主義の分裂』では1言の断りもなしにすますということは考えられない。レーニンは、のちに1917年5月のいわゆる「4月全国協議会」の「戦争についての決議」のなかでは、「現在の戦争は、両交戦国グループのどちらのかわについても、帝国主義戦争である。すなわち、世界支配から生ずる利益の分配をめぐる、金融(銀行)資本のための市場をめぐる、弱小民族の従属化等をめぐる、資本家が行っている戦争である。」<sup>7)</sup>とのべている。文字面にのみこだわるならば、レーニンは再転して《金融資本=銀行資本》に復帰したことになる。1年余りの期間に2度も変説させられてはレーニンも苦笑せざるをえない。レーニン「変説」説は、「金融資本」概念明確化に貢

献するものとは思われない。

ところで、《金融資本=銀行資本》という定式化を鋭く批判したレーニンが、《金融(銀行)資本》という表現をなぜ用いたのであろうか？ 両者は矛盾してはいないだろうか？ という疑問が残る。もしもそうだとすれば、レーニンの《金融資本》概念は不確定で、いわば星雲状態にあったということになる(政治的文書だから経済学的厳密さを欠いたのだということは、おそらくレーニンを擁護するよりははずかしめることになるだろう)。筆者は、この疑問はつぎのように解決さるべきではないかと考える——すなわち、「金融資本=銀行資本では不十分」は金融資本の本質規定にかんすることであるのにたいし、《金融(銀行)資本》という表現は金融資本の現象形態の規定である。この2つの規定はその意味では決して矛盾していない。資本主義的独占に立脚しての銀行資本と産業資本の融合という本質は、その融合のプロセスおよび融合してしまったのちの存在形態について、それぞれの国のそれぞれの条件に応じて多種多様の(といって必ずしも無数のという意味ではないが)形態がありうることを否定するものではない。

人はしばしば、ヒルファディングは金融資本を産業を支配した銀行資本と規定したと非難するが(そしてこの非難はそのかぎり正当であるが)、ヒルファディングにおいても必ずしも融合そのものが全く看過されていたわけではなかった。ただかれは、融合のプロセスおよび融合の存在形態について、銀行資本の支配という形態を唯一・絶対的なものとして固定化してしまったのである。「所有の集積のすすむにつれて、銀行にたいする勢力を与える擬制資本の所有者と、産業に勢力を与える擬制資本の所有者とが、ますます同1人になることは、明らかである。いわんや、すでにのべたように、大銀行が擬制資本の処理権をますますえつつあるから、なおさらである。……ますます産業が銀行資本への従属に陥りつつあると述べたからといって、それは、決して産業貴族もまた銀行貴族に従属するなどということの意味するのではない。むしろ、ちょうど資本そのものが、その最高段階で金融資本となるように、資本貴族つまり金融資本家は、総国民資本にたいする処理権をますます銀行資本の支配という形態で統一するのである。ここにもまた、人的結合が重要な役割を演ずる。」<sup>8)</sup>(傍点筆者)

ヒルファディングは、資本主義的独占に立脚した銀行資本と産業資本の融合という本質を必ずしも全然無視していたわけではないが、銀行資本の支配という現象形態

6) 副島種典「レーニンの『帝国主義論』にかんする若干の考察」(『経済評論』1957年10月号、p. 69.)

7) В. И. Ленин, Соч. ср. 239. (邦訳、全集、第24巻、p. 276.)

8) R. Hilferding, *Das Finanzkapital*, 1955. S. 336. (林要訳、国民文庫版、p. 400.)

に眼を奪われてそれを本質と見誤ってしまった。これにたいしレーニンは、当時の情勢のもとで金融資本がもたらば銀行資本の支配という形態をとっていることを認めながらも、金融資本概念の本質をそうした現象形態の背後からえぐり出すことに成功した。かれが1917年のいわゆる「4月テーゼ」で「金融(銀行)資本のための市場をめぐって……」などといったり、またその前後の諸論文でヨーロッパ諸国を支配しつつあった銀行資本をしきりに非難したのは、当時の情勢のもとでは金融資本がもたらば銀行資本の支配という形態による膨脹に努力し、それが帝国主義戦争を準備し展開させる基本的動因となっていたからであった<sup>9)</sup>。

### III

銀行資本の支配という形態は、金融資本の成立過程においても、また成立以後においても、必ずしも唯一・絶対的なものではないということは、異なる諸国の金融資本の特性の比較および同一の国の異なる金融資本の特性の比較のばあいきわめて重要である。われわれにとって重要なのは、金融資本の本質の検出なのであって銀行資本の支配という形態の検出そのものではない、ということ忘れてはならない。アメリカについていえば、金融資本としてのモルガン財閥とロックフェラー財閥とは、その成立の過程においてもその後においても明らかに差違が見うけられる。こうした相違が他の諸国にみられてもけっして不思議ではない。

ところで、資本主義の最近(これは第2次世界戦争後という意味ではない)の諸条件のもとでは、銀行の役割が著しく縮小し銀行資本の支配はみられなくなったので、金融資本という用語を廃止するようスイーゼーは主張している。かれは「ヒルファディングは、資本主義発展の過渡的段階を持続的傾向ととりちがえている<sup>10)</sup>」といい、株式会社の新設や企業合同が一応の終点に行きつくし、しかも巨大企業の内部蓄積による自己金融が拡大してゆくにつれて、「かつては光栄の日をもった銀行資本は、ふたたび産業資本にたいする補助的な地位に立ち帰り、こうして企業結合以前に存在した関係をふたたび樹立する<sup>11)</sup>」と断言している。それ故、スイーゼーは、レーニンの規定(冒頭に引用したもの)はヒルファディングの規

定がふくむ欠陥を免れていることを認めながらも、「それでもなお、《金融資本》という用語から、ヒルファディングがそれに与えたような銀行家の支配という内容を取り除きうるかどうかは疑問の余地がある。こういう事情であるから、その用語を全然やめて、その代りに《独占資本》という用語でおき代えるほうが適当であるようにおもわれる。けだし、それはレーニンの《金融資本》の概念に本質的なものをはっきりと表示し、しかも後者のように不注意な読者をして誤解せしめるおそれがないからである。」<sup>12)</sup>とのべている。

レーニンは金融資本という概念を用いたのは、独占資本という概念だけでは「資本主義の最高の段階としての帝国主義」の分析に不充分であったからである。《独占資本》概念のなかに「レーニンの《金融資本》の概念に本質的なもの」が含まれているとスイーゼーがいうのは、むしろかれが「レーニンの《金融資本》の概念に本質的なもの」を理解していないことを暴露するものである<sup>13)</sup>。だが、それにもかかわらず、スイーゼーによって提起された銀行の役割の変化(なかんづく投資銀行の没落)の問題は現代資本主義の研究にとって看過することの出来ぬものである。ヴィクター・パーロ Victor Perlo はスイーゼーとの論争<sup>14)</sup>のなかで、スイーゼーが銀行の役割の変化という現象からひきだした一面的な命題(たとえば、1930年代後半いらい金融中心地としてのニューヨークの重要性は著しく低下したという命題)に正当な批判を加えてはいるが、銀行の役割の変化が最近のアメリカ経済の構造にどのような変化なり影響を与えているかについて積極的な突っこみに欠けているのは遺憾である。スイーゼーの議論にたいして、銀行資本の力は必ずしもそんなに弱まってはいないとか、投資銀行は本来の銀行の本

12) 同上, p. 269. (邦訳, p. 367.)

13) スイーゼー自身は金融資本の本質が何であるかをのべていないが、《金融資本=銀行資本》というヒルファディング的規定をそのままうけいれているようである。かれは financial capital を bank capital と同義語に用いているし (*The Present as History*, p. 195. 邦訳, p. 227.), さらに「南北戦争以前においてさえも鉄道部門では金融資本 [finance capital] が重要な意義をもっていた」(同上, p. 156. 邦訳, p. 179.) とすら書いている。後者の場合は、銀行資本一般というよりはむしろ投資銀行そのものですらある。このような用語法がスイーゼーの単なる書き誤りでないとしたら、われわれはかれの「レーニンの《金融資本》の概念に本質的なもの」にたいする理解を疑問とせざるをえない。

14) Victor Perlo, "New York as the Financial Center", (*Science & Society*, Fall, 1955.) および, *The Empire of High Finance*, 1957.

9) たとえば、「戦争と革命」(全集, 第24巻所収)において第1次世界戦争の性格に関連してレーニンののべているところを参照されたい。

10) P. M. Sweezy, *The Theory of Capitalist Development*, 1946. p. 267 (邦訳, p. 363.)

11) 同上, p. 268. (邦訳, p. 365.)

源的業務たる支払媒介を本来的業務とするものではないからそれをもって産業との結合における《銀行》を意味するものと考えられないとかのべても、けっして正当な反駁とはなりえないであろう。

金融資本にかんするスウィージーの見解の最大の弱点は、かれが金融資本概念の本質を理解していないという点にある。金融資本の本質は、資本主義的独占に立脚した銀行資本と産業資本の融合である。アメリカにおいても、融合の過程および金融資本成立後若干の時期は、銀行資本の支配という形態が支配的であったことはスウィージーも認めるところである。だが、1930年代末期より銀行資本の支配という形態は支配的ではなくなった。スウィージーは投資銀行の没落のなかにこの転換の集中的表現を見出している。かれによれば、投資銀行家没落の基本的原因は(1)経済の発展テンポが急激に低下したこと(2)僅かに行われた経済の拡張も殆ど既存の巨大会社の支配下で行われたが、かれらは莫大な内部資金を擁していた(3)組織化された投資とくに生命保険の成長(4)投資銀行家の従来の活動分野に連邦政府が進出していたこと、などである<sup>15)</sup>。これらの基本的原因を考慮した上でもなお、投資銀行家の没落(銀行の役割の変化)が金融資本の本質に変化を与え、銀行資本と産業資本の融合を破壊ないし解体したことは考えられない。融合という本質がスウィージーのあげた諸要因(それ以外の諸要因をも含めて)のもとで別の現象形態をとるに至っただけである。

金融資本の上に成立する金融寡頭制は、かれらの利潤

が銀行資本と産業資本の融合に立脚してえられることをよく知っているので、株式の新規発行業務や企業合同が少なくなったからといって、融合を解体し、銀行をかっての「仲介者というひかえ目の役割」にもどそうとはしていない。投資銀行の没落も金融資本の用いる諸種の金融機関のうちの1つの役割が低下したことを意味するもので、それは他の金融機関(生命保険)の役割が相対的に上昇したこととある程度対応している。現在の商業銀行はもっぱら中・短期信用しか与えていないが、それにもかかわらず金融寡頭制はかれら独自の商業銀行の強化・拡大にけっして冷淡でないことは、ここ数年のめざましい銀行合同運動をみれば明らかである。ここでの主題からはずれるので他に譲らねばならないが、内部蓄積、自己金融の問題は、金融資本概念の否定よりは、金融資本の新しい存在形態——国家独占資本主義のもとにおける——に関連せしめてのみ正しく理解されうるのではないだろうか。

#### IV

いまやあらゆる帝国主義諸国の金融資本が銀行資本の支配という形態を脱したと断言したら、おそらくそれは誤りであろう。しかし、国家独占資本主義という新しい局面のなかでいかなる国の金融資本もその存在形態に多かれ少かれ変貌を来していることも看過できない。したがって、われわれの金融資本研究は国家独占資本主義との関連において進められなければ十分な成果をあげえないであろう。

15) P. M. Sweezy, *The Present as History*, 1953. pp. 192~193. (邦訳, pp. 224—225.)